洛友会々報

京都市左京区吉田
京都大学工学部
電気科教室内
洛友会

加藤先生記念会の一コマ

加藤信義先生記念会行事

去る十月廿八日停年御退官になつた加藤先生の御功績を記念し、感謝と慶祝の意を表するため「加藤信義先生記念会」の祝賀行事が十一月二日午後一時より京大楽友会館において挙行され、遠近各地よりの参会者が会場に溢れる状況にて、定員を超過したためお申込を頂いた方々のうち一部御辞退しなければならないほどの盛会であつた。

行事の大要を記すれば

◎記念講演会

林千博教授の開会の辞に始まり、同教授司会の下に

原子時計について　池上淳一氏
電波塔の設計と建設　松尾三郎氏
電子管の現状と将来　佐々木正氏

三氏の講演があり、次いで前田教授の司会に変り

原子力発電の保安問題について　吉岡俊男氏
マイクロ波工学の進歩　熊谷三郎氏

両氏の講演が行われた。これに対し先生の御挨拶があり、前田教授の閉会の辞により午後四時講演会を終了した。

◎記念品贈呈式

先生並に御令室、御令息光則様、敏夫様、四郎様、信夫様、御令嬢河野秀子様、御令孫信一様の御臨席を得て、近藤教授司式により、先ず委員長大久保教授の式辞、記念会事業目録の披露、記念品の贈呈があり、次いで小磯良平画伯の筆になる肖像画並に静物画の除幕が満場拍手のうちに御令孫信一様の手により行われた。

続いて滝川総長、友人代表乙葉真一氏、門下生代表池上助教授の祝辞があり、更に先生の謝辞があつて目出度く贈呈式を終了した。

「記念晩餐会」

先生御一家を主賓に滝川総長、堀尾工学部長、林工研所長　鳥養本阿部、松田、近藤金助、亀井三郎の各名誉教授、東大電気工学教室代表山下教授、同生産技術研究所代表星合教授、大山東大名誉教授、阪大電気工学教室代表竹山教授、同通信工学教室代表熊谷教授、七里、岡部阪大名誉教授、笹川旧京大教授その他、石川芳次郎氏を始め洛友会々員等、約百六十名の出席を得て午後六時半開宴、大谷教授の司会により、先ず大久保委員長挨拶を述べ、続いて先生の謝辞があり、滝川総長の発声で先生御一家のため乾杯、名曲放送のうちに宴漸く酣となる頃、司会を受継いだ山村忠行氏の指名により、堀尾工学部長、山下、星合両東大教授、熊谷阪大教授、岡本名誉教授、石川洛友会副会長、阿部名誉教授、林重憲教授、大山東大名誉教授のテーブルスピーチが和気靄々裡に行われた後、大谷教授よりベル・テレフオン、ラボラトリーのポーキングホーン氏、滞米中の古賀東大教授等からの祝電披露があり、最後に石川洛友会副会長の発声により先生の萬歳を三唱、八時半名曲放送のうちに晩餐会の幕を閉じた。

また、同日午前十時より工学部主催、先生の記念講演が工学部共同第一講義室において開催され「電子工学の発達」と題する御講演を拝聴、卅九年に及ぶ御研究成果に聴衆一同深い感銘をうけた。

なお先生の退官記念行事の詳細は近く「加藤先生退官記念論文集」に抄録し、醵金者及び関係機関に配布する予定である。

最近の欧州瞥見

昭七　松山直樹

昭和十四年九月から同廿一年一月まで、パリ、リスボンに駐在していましたので十一年振りに見る欧州は感慨深いものがあります。今回渡欧の目的は日本がスイスに発注した電子式射撃指揮装置及び誘導弾に関する業務と、欧州における防空火器体系並にこれに伴う電子機器装置の調査にありましたので、スイスに約六十日滞在、その他、西独、仏、英、伊、瑞典等の西欧諸国に約四十日の旅行をしました。

既に洛友会の多くの皆様が戦後の欧州を視察されていますので今更ら事新しく申上げることもありませんが、戦時中の駐在に較べて特に感じましたことを述べさせて頂きたいと存じます。

【一】戦時中と違い西欧各国間の障壁が除かれ西欧全体が平均化したことは当然のことながら仔細に見ますと

① 戦勝国英仏に斜陽の影の深いこと
② 敗戦国独、伊、特に独の復興の目覚ましいこと
③ 中立国瑞西、瑞典、西班牙が軍備に汲々としていること

等が目立ちます。

英には最早や予て想像していた大英帝国の俤は見られませんでした。仏ではパリ祭（七月十四日）当日シャンゼリゼー通りでのコテイー大統領の観兵式を見ました。形こそ昔ながらの欧州屈指の美しい軍隊行進でしたが、アルゼリア遠征軍に対する謝意表現を要望する国防相の呼び掛けにも拘らず、気勢は昂らず、米国ならいざ知らず、パリにおける黒人部隊の分列行進はおよそ時代にそぐわぬもので、植民地は最早や前世紀

の遺物という感を深くしました。

瑞典の防空壕施設はソ聯を眼前に控えた国として当然のことながら兵器工場、病院、市民用等、大規模のものが続々と作られています。堅からず軟からず掘りさえすれば、そのまゝで永久防空壕となる地質で出来、地震もなければ湿気もなく安価に出来るとは言え、その気構えには感心させられました。

瑞西の国民皆兵の民兵組織の徹底振りも同様です。「この国は欧州有数の強力な軍隊を持ち、国民皆兵、各戸には銃と弾薬、各村には火砲を格納、動員下令後十二時間にして一〇〇万の武装軍隊の集結が完了します」とは観光バスの案内人の説明でした。あの絵に画いたような美しい平和そのものゝ牧場風景の中に、此処彼処に兵器、飛行機の格納庫が見られ、所々に対戦車障碍物が点在し、日曜日には村々で小銃の実弾射撃訓練が行われているのを見るとき、平和の代償も亦高い哉と嘆ぜられます。

西班牙の新兵器研究熱も旺盛で、戦後独逸技師を招聘し、新兵器開発にどんどん成果を挙げています。

独の復興は今更ら申上げるまでもありますまい。三日間に渉りハノーバーの国際工業見本市を見学しましたが、正に独逸らしく目新しいと言うよりも、出品のすべてに信頼性があり、且つ科学の実生活への繋がりが強く感じ取られました。

【二】本業の兵器の方面を見ますと、原子爆弾、誘導弾に対する防禦対策はまた見つからず（第一次大戦後の毒ガス問題と似た処あり）、攻撃は最良の防禦策とは言え、米ソに対抗して製造に乗り出す力もなく、集団防衛（NATO規格への統一）兵器の空輸化（一度び開戦となれば、あらゆる地上補給路は一瞬にして破壊）等が窮余の対策と見られました。

【三】飜つて、最後に国外の一隅から外国を見た目で日本の現状を眺めますとき、一と際目立つて感ぜられることは、

① 第一にあらゆる日本での問題の根源が人口過剰から来ているように見られること

各国の上級将校と語り合つた際、戦争を避ける道は国際連合でも軍縮でも将又、窮極兵器たる原子爆弾付大陸間誘導弾でもない。各国民に移住の自由を与えるにあると申しました処、誰もが全面的に共鳴していました事ほど左様に日本の人口は稠密に過ぎ世界の問題となつています。現在の国土に五、〇〇〇万人の人口を与えれば問題の大部分は解決すると感じました。

② 第二に日本が西欧物質文化を輸入したときに、その裏の半面たる精神文化（即ち宗教）を置き忘れたこと

欧州の文化は基督教を除いて論ずることは出来ません。日本が唐宋文化を輸入したときには仏教の随伴を忘れませんでした。

現在日本の、而も新憲法下での悩みの一つは宗教と実生活との繋がりが断たれて、物心のバランスが破れていることにあるのではないでしょうか。教育に軍事に基督教の占めている役割の如何に大であるかは、一度でも欧州に旅行された方たちの強く感ぜられた処でしょう。

極めて難かしい二点ながら何時かは何等かの形で解決すべき重大な課題と思われます。

（三二・七・二八チュリヒにて）

東京支部納涼観光会

東京支部では従来年一回秋期家族バス旅行を行つて来たが、今年は更に趣向を変えて夜の東京観光を計画してはという意見が現われ、七月の幹事会に図り満場一致の大賛成にて八月十二日（月）盛況裡に東京夜の観光会が催された。

当日は夕刻六時、東京駅降車口に集合、参加人員は会員七十名、同伴卅三名、合計百三名という大団体となり新日本観光（ハトバス）二台がほゞ満員という状態にて先づ浅草国際劇場に向う。コースの途中は平野、渡辺両ガイドの説明にてお上りさんに対する以上に詳細に渉る東京案内を聞きながら国際劇場に到着、同所において約一時間に渉り市川猿之助、山田五十鈴、高田浩吉主演になる松竹映画「忠臣蔵」（カラー）を観賞（当初の予定では松竹歌劇「夏のおどり」実演観賞の予定であつたが、プログラムの急変更にて、色気不足なりとの声が高かつた）更に車を進めて勝鬨橋の近くから約一時間に渉る東京湾一周に趣きを変える。

当日は盛夏に珍らしい涼しい日であつた上に海上は相当の風で納涼正に百パーセント、船中にて菅支部長の挨拶があつた後、各自持参の弁当を開く。中には乗船場でパンを仕入れる者、それも忘れて友人の弁当の一部を贈与に預かる者などもあるなどして一応腹の虫を押さえる。湾内の景色はマリンガール（今思い出しても素敵なガールであつた）の説明で聞いた当座は一応了解出来たが、後で何処をどう廻つたのかは失念した方の方が多かろう。

バスは更に行程を進めて最後の目的地ナイトクラブ・クインビーに向う。こゝは銀座で一流、外人客も多い所で楽団岡チーム、アダジューダウース、ヌードはヘレン浜田のショーを見る。

適当なお色気でこれならば会員が会員夫人に平常「キャバレーつてどんな所？」と聞かれても自信をもつて答えられるというわけで、而もジュースも一杯（沢山という意味ではない）飲まして頂けて「本当に有難うございました」と心の中で思つた人も多かつたことであろう。

こゝで一応コースを終り、後は銀座に出掛ける組、同じバスで新橋駅、東京駅、新宿駅と廻り十時四十分頃、楽しかつた旅行を終つた。

今回の参加者は明治卅九年の大先輩、岡村金蔵氏から昭和卅二年の新卒業生までの年令層で半世紀に渉るひろがりを持つており、同学同窓の意義の深さが泌々と感せられた。たゞ同伴者については幹事がちよつと気を廻し過ぎた注意を書いたためか比較的少なく、殊に当然お友達を同伴すべき昭和二十年以降の会員に同伴が少ないのは残念であつた。実績に示す如く幹事の良識によつて今後も充分上品、安全、而も低廉という三拍子揃つた計画を致します故、毎回多数の会員の参加を願つて止みません。

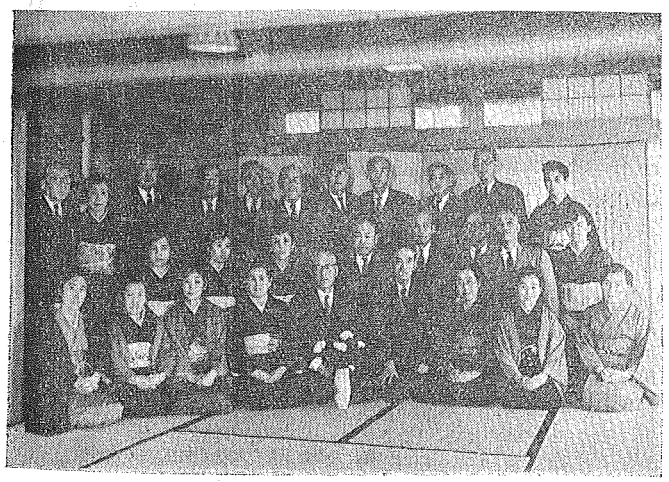
尚、秋の旅行は例年通り休日に子供、お友達及び令夫人同伴向きのものを計画致しております。

（総務幹事　高崎記）

東京支部　秋のバス旅行

恒例秋のバス旅行は去る十一月三日（日・祭）多数の参加を得て行われた。当日は昔の天長節、明治節で統計的に雨が降ることはないとの確信の下に案内状を発送し、回答を寄せられた会員二百卅五名、内出席会員七十名という返事を握つており、シーズン最中でバス払底のところを三台手配していたが、前夜小雨があり、雲行き怪しく幹事を心配させたが、期待通り一点の雲もない文化の日晴れで会員　同伴者の集りもよく百廿六名という盛会である。

バスは定刻五分遅れて午前八時二十分発、代々木を出発、大宮を経て先づ吉貝百穴に向う。前夜の撒水指令が効いて塵もなく道は快適である。百穴は旧い墳墓の跡ということであるが、皆下車して珍らしげに穴に入り、光苔を見たり仲々賑かである。バスは更に順路を長瀞に向い一時近く目的地に到着、こゝには宝登山神社（祭神、神日本余盤彦命）、秩父自然科学博物館もあり、休憩の茶屋も予約してあつたが、お腹と予



信友会

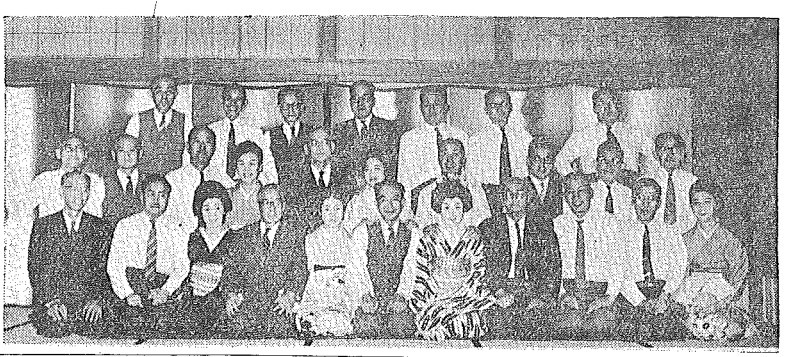
算の都合で皆川原に直行、中食が始まることゝなつた。長瀞の溪谷は岩石の種類が多く、流れは緩かで船遊びの楽しみもあるが、沢山の人出で適当な場所を占拠するのに一苦労という有様である。

午後二時四十分、名物長芋を土産などに買込んで乗る人も多く出発、バスは更に秩父の町を経て正丸峠への道を向う。道巾の狭い秩父の町を抜ける頃から十四、五台の観光バスが列をなして九十九折の道を登る姿は仲々の壮観である。（但し先頭の三台だけが洛友会）正丸峠の頂上は場所柄だけに遠望も利き、当日も晴天であつたため一部の眺望を窓にしたが、写真を撮るにも人が邪魔になるという有様で残念であつた。丁度入り日の時刻に当り釣瓶落しの薄暮の中に峠を出発し帰途につく。飯能 所沢・田無を通る頃は一日の疲れで寝込む者も多く 定刻七時半過ぎには新宿駅西口に着いて楽しかつた一日の行楽を終つた。

今回の旅行は（毎年秋の旅行はこうなる傾向にあるが）バスの走行時間のみ無暗に長く、ゆつくり会員家族の団欒を共にする時間が短か過ぎた嫌いがあり、来年の旅行については適当な場所を選んで、もう少し寛ろぎたいとの声も聞かれた。何か来年二回の旅行について御意見御希望のある方は幹事までお申出でを頂きたい。

（幹事 高崎勵）

十四日会



第五回関西支部総会

十月八日（火）午後五時より大阪市北区桜橋、大阪毎日会館、日立ショールーム階上において関西支部総会を開催した。

先づ映画鑑賞後、午後六時より青原副支部長議長となり、昭和卅一年度決算報告を承認し、次いで昭和卅二年度予算を満場拍手裡に可決した。役員選挙は議長一任となり、支部長に今田英作氏、副支部長に小宮義和氏、森薫氏が指名され満場拍手してこれを迎えた。

今田新支部長の挨拶があつて、教室幹事の近藤教授より教室の状況特に新卒業生の就職状況について詳細な報告があり、次いで新入会員の紹介があつた。

午後六時半より懇親会に移つたが、終始なごやかな雰囲気となり、互いに談笑裡に旧交を温めつゝ時を過ごした。

最後に、青原前副支部長の発声にて洛友会萬歳を三唱して午後八時過ぎ散会した。

尚、本総会開催に当り、会場その他につき日立製作所大阪営業所長小宮義和氏に多大のお世話になつたことを茲に感謝します。

出席者

明四五 道国 貞治
大三 田中 稔
五 稲田 虎彦
六 上林 一雄　光野 重威
山村 忠行　松田長三郎
山西 清信　阿部 清
七 宮崎佐加枝
八 山本昂之助
一二 藤田 誠治　幸前 治一
今田 英作
一三 青原 義重　奥谷 久彦
一四 木津 圭蔵　大久保達郎
口羽 玉人
一五 前田 安道　小宮 義和
二 神先藤五郎　熊谷 三郎
千本木安次郎
林 重憲　西枝 一江
三 富村 精雄　木村 章介
森 薫
四 安本 健助
五 横田清一郎　河合 次男
占部 五郎　青柳 健次
六 加藤 一陽　浅田 英直
七 国本 貞三　永田 良孝
桂田 徳勝　善積 倹一
青山 正次
尾形 理
八 岡村 善勝　山下 正雄
塩見 武夫　田井 梁之
小野 恒造
九 喜田村善一
一〇 小寺 正暁　田村 誠一
小林 秀正　中堀 孝志
一二 中野常太郎
一三 国富佳寿郎　大谷 泰之
一四 山本 清　小南 光夫
一五 板倉 清保
一六 西村正太郎
一七 谷村 愛道　珠玖 泰吉
一九 松本 肇
二〇 八隅 久朗　高橋 圭介
二一 大橋 徹次
二二 大貫 良三　平井 信好
二三 高橋 充夫　米田 豊宏
二四 飯田 義直　森井 清二
二六 杉山 和夫
二七 栗原 英三
二八 岩噌 弘三　加納 忠勝
山本 健三　武藤 良介
二九 大泊 勝　六和 勝
島原 陽一　吉安 龍夫
林 徹　西山 節男
安賀 隆志　森 幹夫
三〇 中野 嗣郎
三一 難波 正行　宮本 一
津田 宏　山口 益生
中村 浩　岸尾 裕之
梶島 皓美　橋本 宗久
安井 貞三
三二 中尾 孝　三好 一賢
江森登喜夫　藤田 惟之
林 重雄　三上 泰生
桑田 博　小見山定士
丹治 道昭　三橋 堯
桜田 武
辻忠夫、岡添柳吉、佐藤一男、間崎龍夫、松田長三郎、大西冬蔵、光野重威
（以上廿二名）

信友会例会

加藤さんの記念祝賀会の催された翌日、即ち十一月三日の正午を期して大正六、七年組の信友会を例により家族同伴にて東山連峰を手にとる如く眺めのよい下鴨高野橋ほとりの料亭大和にて開催しました。

加藤さんと夫人連を正座にしてその労を犒いながら楽しい半日を過ごしました。いつも出席される工藤寿男さん御夫妻が婚礼とかにて見えなかつたことは残念でした。

（写真前列左より）大西夫人、山村夫人、光野夫人、加藤夫人、加藤信義、上林一雄、山西夫人、乙葉夫人、阿部夫人

（第二列中央左より）乙葉真一、保寿康象、山西清信、宮崎佐加枝

（後列左より）阿部清、山村忠行

十四日会 第八十回会記

十四日会については既に数回御紹介したと思うが 昭和七年頃、一本松珠璣氏、木津圭蔵氏により、十四年組の月例午餐会として創められ、数年後に大正十五年組が参加し、昭和十二年には東京にも同じような会が開かれるようになり、戦前既に百数十回の会合がもたれた。

戦後は昭和廿六年から再開され、会員の範囲を拡げて大正十二・十三年、昭和二、三年組が参加し、卒業年次は前後六年にわたり、現在大阪附近の会員数は四十九名に達していて、毎月二十名前後の出席がある。

去る十月十四日は、戦後再開第八十回目に当るので、吉例により夕方より大阪今橋つる家において、大会が開催された。鳥養、岡本、加藤、松田、大久保の諸先生は、それぞれ御所用がありお越し願えなかつたのは残念であつた。また創立者一本松委員長が、原子力発電のお仕事の多忙のため欠席されたのは、時代の花形として止むを得ないことゝは申しながら、今まで大会には一度も欠席されたことがなかつたゞけに淋しかつた。然し七里 阿部、林（重憲）熊谷の諸先生が元気なお顔をお見せ下され、会員も廿二名出席して盛会であつた。

これも吉例により、今田会員より挨拶あり、教室の発展を祈り、諸先生の御健康を御祝い申上げ、また会員相互の健在を祝い合つた。

やがて宴酣にして北陽の金太郎、梅さく、金五郎の舞踊を観賞し、会員有志の隠し芸の披露あり、和気靄々として秋の夜の更くるを忘れた。

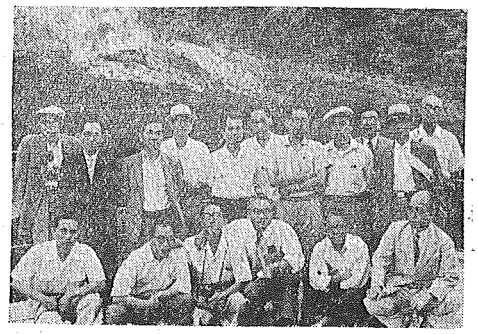
「K生記」

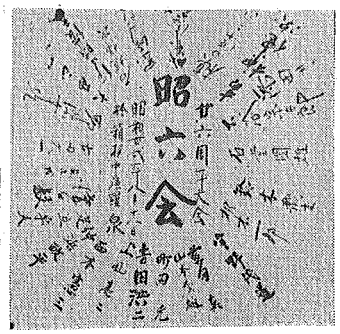
昭六会廿六周年開催

昭和六年卒業クラス会（昭六会）は、廿六周年会を箱根中強羅で会員廿五名の出席を得て盛大に開催した。八月十八日、うだる暑さの中を幹事東京組は午前九時新宿駅を小田急ロマンスカーで出発、十一時中強羅着、さすがに箱根は下界とは比較にならぬ清涼さ、風呂浴びて待つほどに、東は多賀、西は宮崎、北は高岡と全国各地より三々五々と集まり、中には卒業以来初めて会うという連中もあり、お互いに白くなったり、薄くなったり、一寸見分けのつかぬのもつかの間、談笑しているうちに面影は二十才の若き昔に還り「オイル」、「タコ」、「インシュー」と昔の渾名になり、積もる話はいつ尽きるとも知れなかつた。

山間に夕色迫り、ひぐらしの声しぐれる十九時祝賀の宴に入り、御出席の予定だつた林重憲先生が原子力研究所の問題で急に不参になつたが、恒例により遠来の町田、溝口、添田の三君を正座に据え、当夜は全館借切りで何んの気兼ねもなく、酔うほどに、その後仕入れた隠し芸が次から次へと出て、箱根美人の伴奏に「月夜の晩」「女給商売」「ぎおん小唄」さては高等学校の校歌、寮歌と「思い出の歌」に痛飲、放唱、乱舞、尽きとるところを知らず、漸く廿四時一旦宴は閉じたが、徹宵四時まで頑張つた豪の者も居つた。

さて、当夜の戦果はビール百本、酒一斗五升、二十周年の時よりは多少手が落ちたようだつたが、まだまだどうして大したもので意を強くした次第。十九日は夜半よりの雨も雲が切れ、九時より朝食、迎い酒に元気を取り戻し、また一と騒ぎし迎えの借切バスで大涌谷を経て、途中「箱根の山」「ぎおん小唄」等を合唱しつゝ幼稚園の遠足よろしく芦の湖に下り中食、さすがに疲れて割当のビール一本を、もてあまし食後ぐつたり昼寝し、十国峠を経て十七時うだる暑さの熱海着、また会う日を約し右に左に尽きぬ名残りを惜しみつゝ散した。





会費領収

昭和三十二年度（前号より続き）

二四　安房　淳夫
　　林　正之
　　桜井　繁樹
二五　中村　哲夫
　　中山　清光
　　佐々木喜一
　　加納　堯良
　　寺西　謙三
　　武田　哲夫

二六　牧野　英夫
　　吉田　正彦
　　津田　勇
　　池田　栄一
　　森本　俊三
　　小西　良弘
　　北尾　孝也
二七　松本　安弘
　　津田　和己
　　西　徳也
　　根来　恵作
　　宇磨谷　教成
二八　高谷　克己
　　柴谷　浩二
　　松井　正臣
　　林　光男
　　久保　泰夫
　　鴛海　修三郎
　　坂入　吉彦
二八新　山本　健三
　　杉本　宏
　　岡元　昭孝
二九　島田　洋一郎
　　田村　勝
　　佐藤　文紀
　　西山　節男
　　森　幹夫
　　井上　博文
　　岸本　克知
　　間瀬　光朗
三〇　和田本　義章
　　奥沢　祥弘
　　高野　晃
三一　中尾　英夫
　　橋本　宗久
　　長町　恒資
　　岩原　皓一
三二　矢島　義和
　　伊藤　貞男
　　森　俊峻
　　中尾　明
　　高松　寿夫
　　渡辺　昭
　　奥山　惟之
　　萩原　省三
　　森島　宏
　　岡林　茂樹
　　寿松　憲昭
　　玉井　昌太郎
　　原田　房佳
　　竜沢　善信
　　遠藤　茂
　　野中　広
　　辻野　昭夫
　　栗原　英三
　　武藤　良介
　　大西　淑弘
　　中村　弘康
　　朝比奈　隆
　　近藤　耕二
　　中田　高義
　　市川　正憲
　　大塚　健二
　　白杉　孝雄
　　染山　英二
　　堀畑　禎文
　　桑田　英之
　　藤　博哉
　　水野　博哉
　　島村　紀清
　　中村　光
　　伊吹　公
　　豊崎　茂夫
　　木村　磐根
　　飯尾　博一
　　山崎　義夫
　　桐野　魁城
　　谷村　皓実
　　梶井　信一彦
　　岡田　一
　　江森登　喜夫
　　松尾　淳一
　　笹田　滋三
（自昭和廿八年度　至昭和三十年度）
（九月十一日より十一月十日まで到着の分）

昭一〇　梅本　忠夫
二八新　淵　啓一
（自昭和廿九年度　至昭和卅一年度）
大一二　堀内　正豊
昭一六三　永安　弘
（自昭和三十年度　至昭和卅一年度）
昭二一　下村　孝一
（昭和三十一年度）
昭一九　鈴江　邦一
二九　上村　隆俊
（自昭和廿八年度　至昭和卅二年度）
昭二三　服部　角男
二八新　田中　恒俊
（自昭和廿九年度　至昭和卅二年度）
昭二三　井上　光生
（自昭和三十年度　至昭和卅二年度）
昭一六三角田　章
二一　日下部悦二
二六　羽倉　幸雄
二八新　阪上　宏
（自昭和卅一年度　至昭和卅二年度）
明四五　真崎　不二
大一一　今村　康隆
昭三　太田原隆定
四　松本　軫治
五　田中　武夫
七　鈴木　茂
一〇　高木　正
一一　船谷　辰男
一三　山口　高雪
一四　伊藤　久昭
一六三豊田　実
一七　竹嶋　正己
二〇　小林　正明
二二　出口　弘
二三　西尾　又一
二四　山下　裕
二五　江口　潤
二五　西田富士夫
二六　岡本　裕允
二七　忠末　裕治
　　阿部　鉄郎
　　柴田　宏
　　桜井八太郎
　　小堀富久夫
　　萱島　敬一
　　小鷹狩大輔

二八新　俣野　経一
二九　渡辺　宏
三〇　槙田　浩二
三一　黒木　正明
　　秦　祐夫
昭和三十二年度（第三回）
（九月十一日より十一月十日まで到着の分）
明三九　中島　卓爾
四一　内田秀四郎　国弘　長重
四四　中島　謙二　小島喜久馬
四五　古田　正康
大四　渡辺　競
五　金井　利義
六　奥平　安
七　石井　浅八
一一　太田　章平
一二　東　義胤
　　羽村二喜男
一三　関　三郎
　　村上　竹夫
一四　樋口竹太郎　吾郷　侃二
昭二　鳥谷　隆弘　前田　龍作
　　太田　音吉
三　青山　政次
四　斎藤亥三雄　本中　角市
五　内田　佑二　鈴木　亮三
　　松井　貞信
六　進藤　陽吉　足立　斌
七　青柳　健次　遠藤　敏雄
　　和田　昌博　桂田　徳勝
八　西谷平一郎
九　吉田　辰雄　川嶋　一夫
　　岩田　太一　高橋　光雄
一〇　斎藤　敏信　北井　方
　　高田　昇平
一一　大森　武司　古池　弘正
　　佐々木　正
一二　稲田　豪吉　中野常太郎
　　清水　淳一
一三　伊藤英太郎　近藤喜久治
　　田中　幸男　国富佳寿郎
一四　長坂　孝一　西本　清一
一五　吉田　直浩　松本　清隆
　　川西　武　松井　茂
　　角井　勉
（次号へ）